

「ひとり」で生き 桜葬で新たな縁

コンピューターで制御された都会の巨大納骨堂から、桜の花が咲く郊外の樹木葬の丘へ。作家の高橋源一郎さんが、「死後」というテーマに向き合う思索の旅をしました。自身が経験した身近な人々の死が、旅の出発点でした。葬送のあり方についての社会的な議論を広げていくために、寄稿を掲載します。

わたしの足元近くには母の遺骨を納めた骨壺が置いてある。半生を古い家族制度に苦しめられた母は、嫁ぎ先の墓に入ることを拒んだ。だからわたしは、遺骨と共に20年以上暮らしている。その母の苦しみに長く寄り添い、昨年亡くなった弟がわたしに遺したことは「家の墓終いをしてほしい。ぼくは桜の樹の下で眠りたい」だった。

「目黒御廟」はJR駅から歩いて数分の、地上3階・地下1階の高級マンションのような近代的ビルだ。実は1万基近い「墓所」が用意されている都内最大級の「納骨堂」である。そこにYさんの「墓」がある。

Yさんは新しいラジオ番組を立ち上げ、わたしはそこに長く出演した。番組が終了する頃、Yさんは退職した。愛したラテン文学の世界に戻るつもりだ、といったYさんは、その直後、事故で亡くなったのだった。

フロントでYさんの名前を記入すると、ICカードが渡された。カードを受付機にかざす。モニターに表示された指定の参拝用ブースに移動し、ホルダーにカードを差しこむ。すると、正面の「扉」が開き「○○家」と刻まれた墓石に似た銘板が出現した。コンピューター制御で、遺骨を納めた箱が自動的に運ばれてきたのだ。傍らのモニター画面に、そこに眠っている人たちの遺影が次々に現れた。Yさんのご両親、そしてハンチングをかぶったYさんも。わたしは瞑目し両手を合わせた。どんな「墓」でも、そこを訪ねる人がすることは同じだ。

「マンション型」とも呼ばれるこの「自動搬送式納骨堂」が、なぜ都会の真ん中に出現したのか。担当者はこう語ってくれた。

「ひとつの理由は、後継者の心配をしなくてもいいからです。子どもに墓の管理の手間をかけたくない人や子どもがいな

い人が増えました。都会の墓は値段も高騰して入手が難しくなっています。大規模な集合型なら出費も抑えられるし、なににより近い。いつでも気軽に会いに来ることが可能です」

2019年以降、日本は「夫婦と未婚の子のみの世帯」より「単身世帯」の方が多い国になった。「ひとり」で生き「ひとり」で死ぬことが当たり前になった社会に住む者には、「死んだ後も生きつづける」場所を護

つてくれる「誰」かはもうない。いや墓そのものも変わりつつある。わたしは驚くべき調査結果を聞いた。「お墓の消費者全国実態調査」によれば、「一般墓」が多く買われた時代は終わり、いまは目黒御廟のような「納骨堂」（約16％）とほぼ並んでいるという（約17％）。もっとも人気があるのは「樹木葬」（約49％）なのである。

東京都町田市にある樹木葬墓地を訪ねた。そこでは桜の樹を墓標にして、その周りに人びとが眠っている。正式名は「エンディングセンター桜葬墓地」である。訪ねたのは3月末だ。何種類もの桜がある墓地では、既



桜の木を墓標とする「桜葬」の現場を訪れた高橋源一郎さん。各所で開花が見られた11月3月27日、東京都町田市



JR目黒駅近くにある「目黒御廟」には高橋さんの友人も眠っている＝東京都品川区、いずれも友永翔大撮影

遺族なきひとに 「死者の人権」を

に散った桜も咲きかけている桜もあった。やがてわたしは「桜葬」の場所に行き着いた。

「墓地」ということばから感じる冷たさや厳しさや寂しさはそこにはなかった。木々の間を風が吹き抜け、桜が大きく枝を広げ、その場所を護っていた。「墓地」であるにもかかわらず、わたしは思わず「美しい」と呟いたのだった。

桜の下には一面に芝生が広がっていた。墓石は見あたらない。一角に小さな「銘板」があり、たくさんの名前が刻まれていた。豊かな自然の中、生え揃った芝生の下で、彼らは眠っていた。ひとりで、夫婦で、あるいはペットや友人と共に。子どもがいない人が、障がいのある子どもを持つ親が、故郷の墓を護れなくなった人が、「家」の墓に入らない選択をした人が、それぞれ異なった理由でそこにやって来たのである。

桜の樹の周囲を数十メートル区切り、多くの人たちが「集合住宅」のような形で埋葬される。それが「桜葬」だ。最大の特徴は、その「利用者」たちが「生前」からコミュニケーションを交わしていることだろう。たとえば、いつか共に眠る者たちと一緒に食事をして「向こうに行ってもワインで乾杯しましょう」と約束する。年に1度、桜の花が咲く頃、利用者と遺族が集まって合同祭祀を行う。

長い間わたしたちは、「死後」を「家族」に委ねてきた。けれども、「ひとり」で生きることがふつうになり、「家族」があっても、葬送や墓や祭祀が負担になってきたとき、新しく「死者」を見守る「誰か」、あるいは「なにか」が必要となった。それが「桜葬」という名前の新しい葬送スタイルだった。

そこには「血縁」とは異なつた「縁」が生まれた。親子だから、親戚だから「縁」があるのではない。彼らがまだ生きていた頃から、「家族」を超えた「縁」が作り上げられた。現実の世界では「ひとり」で生きるしかなかった者たちが、桜をシンボルとするこの場所で、新しい共同性を作り上げたのだ。

桜葬墓地を世に出したNPOの理事長であり社会学者でもある井上治代さんは、著書の『墓をめぐる家族論』の中で「庶民が今のような墓石を建てた墓をつくるようになったのは、江戸中期以降のことだ、それまでは、遺体を放置した遺体遺棄葬が一般的であった」と記している。「○○家」と刻まれた墓を多く見かけるようになったのは、実は明治民法が「家」を法制化して以降にすぎない。日本人は遥か昔からずっと自然の中に葬られてきた。だとするなら、わたしたちは元いた世界に戻りつつあるのかもしれない。

井上さんはこの墓地について記した記事の中で「死者の人権」ということばを使っている。長い間「死後の担い手」は遺族だった。けれども、「独居」が多数となる時代に激増する「遺族を確保できないひと」とは、社会的支援が整備されないまま放置されている。彼らは「人間らしく死ぬ権利」、即ち「死者の人権」を奪われたのだ。「死者の人権」に冷たい社会は、実は「生者の人権」にも冷たいのだ。

父は死の2日前に生涯で付き合った女たちの名前をノートに書き残して亡くなった。母や弟についてはもう書いた。みずから「死」について意思表示すること。それは去りゆく世界へ感謝と別れを告げるために個人が行う最後の儀式なのである。

ともに歩いて

「ペットも一緒に帛（う）ってもらえるんですね？」。納骨堂でも樹木葬墓地でも、高橋源一郎さんはスタッフにそう確認していました。ペット好きのパートナーのことを頭に浮かべていたそうです。自分の葬送のあり方について考える行為には高橋さんにとってどんな意味があるのでしょうか、という問いへの答えはこうでした。「死をどう迎えるかを子どもに見せることが親の最後の仕事なんだと思う」

（編集委員・塩倉裕）